

眉村卓



TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー7

ヘデヌエヌス
ヘ彷徨



TOKUMA NOVELS

眉村 卓

不定期エスパー 7

〈ヘデヌエヌス
ヘ彷彿 徳〉

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

©Taku Mayumura 1989

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-154033-5

眉村卓

TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

7

ヘデヌエヌス
彷徨



3-5 C0293 P700E(0) 定価=700円
(本体=680円)

不定期エスパー7・眉村卓

ふていき

まゆむら たく

『書収録分は、一九八八年六月号から一九八八年七月号にわたり『SFアドベンチャー』』上に掲載されたものである。単行本化を切するファンに应えて、待望の第一巻が出されたのが一九八八年七月。以来、本作で七巻。来年初頭に出る予定の第八巻で、いよいよ完結となる。長かったのか、短かったのか……。



TOKUMA NOVELS



長篇青春冒險ロマン

不定期エスパー

7

ヘデスエス
ヘ彷徨

戸村卓



間書店

TOKUMA NOVELS

目次

ヘデヌエヌス

7

彷徨

169

本文挿画・小林智美

ヘデヌエヌス

ぼくたちは、歩きつづけていた。前方に長く伸びた影が、踊っているのだった。

振り返ると太陽は、ぼくたちが越えてきた山の稜線に触れようとしているのである。

ぼくたちが歩いているのは街道であつた。街道というのが正しいかどうか、ぼくにはわからないが、それがふさわしいような気がする。ポズトニ・カルカースの話によると、ここは旧道の由で、両側には背の高い並木もあるのだ。

道の外側は起伏する丘のつらなりであり、草におおわれていた。あちこちに家も見えるのである。すでにネプト第一市迄あまり遠くないのに（事実、ぼくたちの行く手には建物の群列が浮かびあがり、ごく僅かずつではあるが、気がつくたびに近づいている感じなのだ）こんな風景があるというのは、驚きであつた。ネイトリカイヤツのたとえばカイヤツ府ならば、中心部

からずっと離れても町や工場が至るところにあるはずなのだ。なのにネプトーダ連邦の首都のネプト市近郊がこうだというのは……だが、ぼくのそんな疑問は、ポズトニ・カルカースの説明でたちまち氷解した。このあたりは保存区域なのだそうである。

もっとも、そんな眺めばかりではなかった。路傍には五十メートルか百メートルおきに、さまざまなスタイルの車が放置されており、道自体にも人々が捨てたらしいがらくたがころがつていたのだ。もはや誰も片づけたり掃除したりしないということなのだろうか。黄ばんだ陽を受けて、それらは、荒廃のはじまりを告げているようであつた。

道を行くのは、ぼくたちだけではなかった。荷物を持ってネプトへ向かう家族連れらしいのが、ぼくたちのだいぶ先に、さらにその先にもいくつかのグループが歩いているようなのである。かれらがどこからネプトへ逃げ込むのか、一度ネプトを出たけれども引き返すことにしたのか、ぼくには何もわからない。のみならず……ぼくたちは、こちらへ歩いてくる連中と何回か擦れ違つたのだ。かれらがどういう存念なのか、

これまたぼくには見当もつかないけれども、擦れ違う
そうした人々はおしなべて無表情で疲れた印象であり、
ぼくたちにちらりと視線を向けるだけで、通り過ぎて
行ったのである。

こうして見てくると、これはたしかに平時のおだや
かなたたずまいとはいえないであろう。ただごとでは
ないとの気分があるのは否めないだろう。

しかし。

こんなことで良いものか——と、ぼくは思わずには
いられなかった。ボズトニ・カルカースやザコー・ニ
ヤクルの言によれば、旧道といつてもここには、乗用
浮上機や浮上貨物機がたえまなく往来するのが普通だ
った、というし、ほかにも外国人のぼくにはわからない
異変がいくつもあるのかも知れないから、この景色
が異様なのには違い不在于であらう。だが、今はネプト
が敵に大きく包囲されており、その包囲網が絞られつ
つあるときなのである。ウスの艦とおぼしい巨大物体
が上空をわがもの顔に移動しているのだ。味方の艦艇
が粉碎され地上戦隊は大損害を受けつつネプトに追い
込まれている。ネプトーダ連邦は降伏を迫られ、おそ

らくはろくに抵抗する力もなくなっているだろう。ネ
プトは後退してきた兵員や戻ってきた市民、流れ込ん
だ人々をかかえ込み、以前からいる市民と一緒になっ
てふくれあがっているはずなのだ。要するに、ネプト
ーダ連邦、というよりネイトIIダンコールの、とりわ
けネプトにとっては最後のときが迫っているのである。
かけねなしの非常時なのであった。

それが、この有様はどういうことだ？

あまりにも平和過ぎないか？

もちろんぼくは、ネプトやネプト周辺が地獄になり
殺し合いや奪い合いが至るところで見られる——とい
うようなことを期待してなどはない。だがそうなっ
ても仕方がないし、そうなるだろうと覚悟してはいた
のだ。

それが……。

この人たちは、ぼくなどとは全く違う精神構造を
持っているのか？

それとも、地理的なあるいは時間的な関係で、こう
いうことになっているのか？ この道は旧道だとの話
だから行き来する人間が少ないけれども、他の道では

ごった返し騒ぎが渦を巻いているというのか？ でなければ、すでにネプトに入るべき人間はみな入ってしまった、ぼくたちは遅れてしまった者として歩いているから、こういうことになっているのか？

とはいえ……ぼくはおのれのそんな気持ち、ふたりのダンコール人に喋ったり訊いたりしなかった。ネプトの人間にそんなことを喋るのは何だか非礼のような気がしたし、訊いたところでふたりにもわからないだろうと考えたからである。

歩きつづけるうちに、ぼくたちの影は薄くなって消え、並木の枝々やあちこちの丘の頂きに移った陽も、じりじりと上へせりあがって行った。そのぶんだけ、上半部を照らし出されたネプトのビル群は近くなり明確になってきたのだ。

そして。

その時分になってぼくは、多少ではあるものの、やはりそうか、そうだろうな——と、納得することになった。

道から外れた野に、ひとつ、またひとつと、テントやら、柱を打ち立て布を屋根代りに張ったものが、見

えるようになってきたのである。それらには、それぞれ十人以上の男女や子供が出入りしているようであった。野外での仮泊、というか、当座の生活をそこで営んでいるらしいのだ。その数はネプトに近づくにつれて、しだいに多くなったのである。乗り入れた車の周囲に集まっている連中もあった。

が。

そうした野営は、間もなく道の両側や傍に家々が出現するに及んで、見ることができなくなったのだ。

家々というのは、ネプトのすぐ外に居を構えることが可能だった人々の、その豊かさを証明するように、いずれもゆったりした敷地を持つ、しゃれたものばかりである。

それらの家々の、道に向かった境界線には、例外なく何本もの立て札が突っ立っていた。ダンコール語を話すのにはようやく馴れかけてきたとはいえ、文字はまだろくに読めないぼくは、その立て札に何が書かれているのか、ふたりのダンコール人にたずねたのだ。ふたりの返事は簡単だった。住民共同防衛地区とされるされているのだそうである。

「住民共同防衛地区？」

ぼくは、顔をしかめた。

いったいどれほどの武器と兵員で“防衛”するつもりなのか知らないが、こんな、別に何の用意もしていない状態で、敵が殺到してきたときに寸秒でも支えられるとは思えなかったのだ。

そうではない、と訂正したのは、ボズトニ・カルカースである。ボズトニ・カルカースによれば、これは集団での暴行や掠奪に備えての住民どうしの自警組織があることを示しているのだそうであった。つまり、敵に対してではなく、暴徒の侵入を防ぐためにこんなことをやっているらしい。これでいかほどの効果があるか、怪しいものだが、とも、ボズトニ・カルカースはつけ加えた。

ザコー・ニャクルは、自分のことしか考えない奴らが！と、吐き捨てるようにいった。

そういうことなのか、と、ぼくは思った。なるほど、だからこの近辺の、立派な家々のあるあたりには、野営の連中はいないのである。家を持つ人々が近づけようとしないのであろう。

そういう暴徒は、いつ、どこから出現するのだ？しだいに暮れようとする中、だがぼくの視野には、それとおぼしい姿はないのだった。夜になって横行するということだろうか？ そうなれば、野営の人々はひとたまりもないはずである。いや……野営の人々が暴徒と化することだってあり得るのではないか？

いずれにせよ、これはぼくにはいかにも奇妙な感じであった。少しおかしくさえあったのだ。

だって、そうではないか。

敵に占領されこれ迄の社会組織や秩序が何の意味もなくなってしまうえば、所有権だっていつ奪い取られるか知れないのである。へたに守ろうとすれば、生命さえ失うことになるかも知れない。そういうさいに、目の前の社会不安だけに氣をとられて、家や土地を“防衛”しようなどとは、あまりにも馬鹿げている。これ迄に得たものを保持したいというのなら（国家存亡のときに、あまり賛成したいことではないけれども）いち早くすべてを携行し得る物品に換えて逃げ出すほうが賢明ではあるまいか？ まあそれだって、どこへ逃げるのか、そんな真似をして結局は誰かに襲われて皆

殺しにされすべてを奪われるかもわからないが……すくなくともこの場にしがみついているよりは、ましではないのか？ 当人たちにとってはこれは笑いごとではなく、必死なのだろうが、かれらには、戦争に負けるということが、まだびんときていないのではないのか？ 敵とたたかっているのは連邦軍団の兵員だけなので、自分たちは自分たちであって市民生活の延長線上にあり、一時的な混乱がおさまればまた元に戻ると錯覚しているのではないのか？ 本当に「大変な」とを想像する力がないのではないか？

いや、これは、いい過ぎかも知れない。ずっと戦闘に従事し敗れつづけてきた、しかもよそのネイトの人間の、腹立ちと呆れをもろに露呈した意見なのかもわからない。

ともかく……かりにこの家々の住人たちがその財産を暴徒から守り抜いたとしても、それは何の意味もなかった——ということになるのではあるまいか。

それにひきかえ、こちらは気楽なものだ——と、ぼくは思った。失うべきものは、自分の生命以外には何もなくて、その生命だっていずれそのうちになくなるの

だと観念せざるを得ない立場なのだ。むしろ、ぼくたちのほうが自由だとはいえないか？ と、そんなことを考えたりすると、ぼくが笑いたい気分になったのは、おわかり頂けるだろう。

そして。

ぼくは、こういう自分自身の心理が、いささか妙であることも、自覚していたのだ。

ぼくは、もっと追いつめられた、もっと重い気持ちになっていて、しかるべきだったのに……そうではないのである。

くだいようだが、ぼくはどこへも逃げようのない立場に置かれていた。わが軍は潰滅し、しかも取り残された兵として、異郷のネプトへと味方を追って急いでいるのである。ネプトは敵に押し包まれ、早晚終末を迎えるであろう。つまりは死を約束されての行動をつづけているのだった。おまけに、きのう迄は生きていた超能力が消えている身なのだ。ぼくの超能力は何度もぼくを救ってくれた。その力がないというのは……いよいよ心細いのである。

そのはずだった。

実際に、そうなのだ。

なのに……今の、どこか明るい、何となく開き直ったようなこの感覚は、どういうことであろう。

前にもこれと似た状態は、ないわけではなかったが……今はそれよりもずっと軽いのだ。どうとでもなれ、どうにかなる——という感じなのである。

これは、前と同様、ぎりぎり迄追いつめられたための開き直りだろうか？ 絶体絶命になったがゆえの達観だろうか。

そんな気味もまじっているのは、否定できない。

だが、それだけではないのだ。

それよりも、もっと大きなものがある。

どうやらそれは、ぼくの例の——何か根拠があるのか全くの錯覚なのか、自分にも不明の……おのれが何とかして生きて行く限り、やがては自分を充足させるものが到来する……光る未来ともいべきものが待っている、という、あの感覚らしかったのである。

たしかにそうなのだ。

しかも、どういうわけか、それはこれ迄にない強さだったのである。

なぜだか、わからない。

わからないけれども……ぼくにはそうとしか思えないのであった。

そのせいで……物事をこんな風に見ているようなのだ。

だったら、それでいいのではあるまいか。暗い気持ちでいるよりは、ぼく自身も楽だし自信も出てくるというものだ。そのために気をゆるめたりしない限り、このまま行けばいいのではないか？

ぼくは、そのつもりになった。

進むうちに家々は増え、同時にあたりは暗くなってきた。

ぼくにとって意外だったのは、日が暮れると、街灯がともったことである。

すべての街灯が、ではない。

そうなっから判明したのだけれども、半分かそれ以上は、破壊されたかどうかして、灯はつかなかった。だから、あちらにひとつ、こちらにひとつという具合に、ぼつん、ぼつんと光りはじめたのである。

これが、最後のときを迎えようとしている都市の近傍だというのか？

これで、人々は不自然だとは思わないのだろうか？
これでいいと考えているのだろうか？

そしてまた、ネプトを取り囲んでいる敵が、ネプトに送られている電力をなぜ断とうとしないのか、ぼくには合点が行かなかった。電力の供給が断たれれば、ネプトはたちまち都市としての機能のあらかたを喪失するに違いないのである。

なぜだ？

なぜ敵は、ネプトの都市としての息の根を止めずにいるのだ？

わからない。

が……その疑念がとけぬうちに、ぼくたちはネプトの市境へたどりついていった。

市境——と呼ぶのは、正確さに欠けるのだろうか。ぼくにははっきりと理解できなかったが、ボストニ・カルカースとザコー・ニャクルが簡単に説明したところでは、一言でネプトといっても、ぼくたちが通って来たあたりをも含めた概念や、第一市と第四市のそれぞれ

れの境界のほかに、歴史的理由にもとづく区分けも別にあって、それぞれがそれぞれの呼び名を持っているらしいのである。そうした境界のひとつに来たというわけであった。

古い城壁の名残があり、そこを通ると、厳密な意味での第一市ということになるらしい。ぼくたちは、そこを抜けた。警備らしい警備もないのであった。

もう完全に夜である。

だが、どうだ。

ぼくたちの前に伸びる大通りには街灯がともっているではないか。よく見るとそれはすべてではなく、かなり間引かれているようだったが、とにかく、街灯がついているのである。

それだけではない。

大通りの両側のビルや、そこかしこにそびえる塔のいくつかは、ちゃんとあかりをともしているのだ。樹々の多さと相まって、それは、かつてぼくが来たときの第一市と、ほとんど変らなかった。たしかに灯の数は少ないけれども、街のたたずまいのその印象は、同じといって差し支えなかったのである。

ぼくはまたもや当惑せざるを得なかった。

この人々は、何を考えているのだ？

しかしながら、もっと注意して眺めると、通行人は少なかつた。ぼくの記憶している第一市の夜は、もっと賑^{にぎや}かだったので、その記憶と比較すると、がらんとしていると形容してもいいのである。しかも人々は足早に歩いているし、眺めているうちにどういいう隊なのか、道のだいぶ先を、列を組んで横切つて行く。そういえば車の数も、あのときとは比較にならないほど減つていた。

「みんな、何を考えているのだ？　これでたたかえると思つてゐるのか？」

ザコー・ニヤクルがいった。

ぼくたちは、いつの間にか足をとめていたのである。

「いやに静かではないか」

ボズトニ・カルカースも呟^{つぶや}いた。

ボズトニ・カルカースがどういふ気持ちでその言葉を口にしたのか、ぼくにはその真意はわからなかつた。ためにぼくは、自分が非エスパーであるのをまた意識させられたのだが……いわれてみると、たしかに街が

どことなくひっそりしているのは本当である。

このすぐあとで、そしてさらにもっとのちに、ぼくは、なぜ第一市がこんな状態だったのかを知ることになったのだが……もちろんそのときには、何もわからなかつたのだ。第一市がこうであるのはどうしてか、また、それはどういふことであつたか……そのときのぼくは、ろくに考えもしなかつたのである。

「どうする？」

ザコー・ニヤクルが、ぼくとボズトニ・カルカースに視線を投げながら問うた。「おれはひとまず学校へ行つてみる。行けば仲間がどうしているかわかるだろう。お前たちはどうする？」

「できるなら、とりあえず同行させて貰いたいな」

ボズトニ・カルカースが先に答えた。「私にはもう、家族も身寄りもない。帰るべき家だって、ないも同然だ。ついでに行くだけ行つて、それから、また考えよう」

この言葉にしても、裏には深い事情があつたはずだ。しかしザコー・ニヤクルもぼくも、そんな事情をたずねようとはしなかつた。たずねている場合でもないの

であった。

「よからう」

ザコー・ニヤクルは頷いて、ぼくに目を向けた。

「本隊を捜す」

ぼくはいった。

ザコー・ニヤクルが自分の学校へ戻り、ボズトニ・カルカースが同行するというのなら……ぼくはかれらとここで別れ、自分の隊を捜さなければならない。それがぼくの義務なのであった。

「そうだったな」

ザコー・ニヤクルが受けた。

「しかし、どこをどう捜す？」

ボズトニ・カルカースがいった。「ネプト第一市だけでも、相当な大きさなのだ。地理不案内の人間がやみくもに捜しても、どうにもなるまい」

「おれたちと一緒にたたかわないか」

ザコー・ニヤクルは、ぼくをみつめた。

それは、ザコー・ニヤクルがぼくという人間を信じ、ぼくの能力を買っていてくれる、ある意味では友情の証明であつたろう。そのこと自体は、うれしかったが

……そうは行かなかった。

「ぼくは、カイヤツ軍団の兵士だからな」

ぼくは、そう応じた。

「お前は、そういう男だ」

ザコー・ニヤクルはにやりとし、それから口調を変えた。「だが、ボズトニ・カルカースのいう通りだ。捜すにしても、何か情報をつかんでからにしたほうがいい」

「一応、われわれと同行したらどうだ？　ザコー・ニヤクルは自分の学校へ行くのだから、そこで、本隊か、本隊でなくてもせめてカイヤツ軍団がネプトのどこにいますか、教えて貰えるかも知れない」

ボズトニ・カルカースもいう。

「わかった。そうさせて貰う」

ぼくは返事をした。

そうするしかない、と、判断したのだ。

「こっちだ」

ザコー・ニヤクルが前方を指し、ぼくたちは再び歩きだした。

「ウジユベ通りだったな」